

赤十字 NEWS

FEBRUARY 2018

NO.933

2

平成30年2月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第933号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

<http://www.jrc.or.jp>

助けると、
いのちと
未来。



『コウノドリ』作者 鈴木木ユウ オリジナル描き下ろし

CONTENTS

FEATURE_2・3

人道・博愛の精神で支える
日赤の周産期医療
命はすべて尊いもの

TOPICS_4・5

老朽化した「赤十字子供の家」がリニューアル
子どもたちの笑顔のために

“こころのケア”は支援の柱

小林麻耶さん「いのちの授業」
「皆さんには人の命を救う
力がある」

「はたちの献血」キャンペーン
広瀬すずさん「献血は、つながり」

Column

[とっさのとき、どうする?]
脳卒中

AREA NEWS_6・7

福島県/群馬県/茨城県/
京都府/全国

Column

[健康豆知識]
膝痛

WORLD NEWS_8

シリア難民の越冬を支援
マーシャル諸島赤十字社の
正式承認

生命は奇跡です。
テレビドラマになった漫画『コウノドリ』で描かれるように
産声をあげる瞬間まで、何が起きるかわかりません。
一人でも多くの赤ちゃんが無事に生まれ、育っていけるように――。
医師、助産師、看護師は、奇跡のそばに寄り添うチーム。
守るのは、お母さんと赤ちゃんの未来です。



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
TEL: 03-3438-1311
一部 20 円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。



©鈴木木ユウ/講談社



村山泰介さん・悠子さん・快都くん(生後4カ月)

出産時の快都くん。頑張りました



大正11年に日本赤十字社産院が開設されて以来、100年近く赤十字病院では、お母さんと赤ちゃん一人一人の命をサポートしてきました。母子にやさしい高度な医療、充実した施設、看護職の育成……。生まれるすべての命には、かけがえのない物語があります。そうした現場の様子を葛飾赤十字産院で伺いました。

命はすべて尊いもの

人道・博愛の精神で支える日赤の周産期医療

880gの小さな命。NICUで「生きようとする力」を見守る

26週の時に強い腹痛を感じて病院へ。到着時には赤ちゃんのお尻が見えていたそうです。そのまま緊急帝王切開で出産。880gでした。「両方の手のひらにのるくらい赤ちゃんを見てショックで言葉も出ませんでした」と村山さん。父親の泰介さんも体にくつもの機器をつけた快都くんを見て、涙が止まらなかったといいます。

肺などの発達が十分でなかったため、24時間体制で治療を行うNICU(新生児集中治療管理室)に入院。面会の際には3時間ごとに搾乳してためた母乳を渡していました。母乳を入れた瓶を落として割ってしまい、号泣したことも。「この時は母乳を渡すのが私にできる唯一のことでした。母親なのに何もしてあげられないことが本当につらかったです」

触れ合う時間で深まる親子の絆

快都くんの容体が安定したところから、面会時間中にミルクやオムツ交換をすることも増え、親子の絆が深まったといいます。「自宅に戻ってちゃんとやっつけていけるかと心細く感じることもありましたが、触れ合う時間が親と

しての自信につながりました」スタッフとの交換ノートも村山さんの心の支えに。「快都と会えない時間の様子が書かれていて、毎日ノートを見るのが楽しみでした。今も大切に保管しています」。同院では、親子の触れ合いだけでなくきょうだいの面会の場を設けるなど、家族の「こころのケア」にも注力。その根底には「子育ては本来楽しくて夢があるもの。その喜びを知ってほしい」という思いがあります。「まだ不安もありますが、今は元気に成長してくれているので、それだけで十分。こゝ(葛飾赤十字産院)でなかったら今の家族の形はなかったと思います」

妊娠が順調でも早産になることは少なくありません。早産の場合、自発呼吸ができないケースが多いので、病院で出産してはなかったら助けられなかったかもしれません。ここまで回復したのは快都くんの生命力が強かったから。赤ちゃんの生きる力は偉大で、長年NICUを担当していても驚くことがたくさんあります。私たちにできるのはこうした赤ちゃんの「生きようとする力」をサポートすること。そのために全力を尽くしています。



担当の小児科部長 熊坂栄医師と清水映里子助産師

行い、情報共有する時間を設けています。「産婦人科と小児科だけの病院ですから妊婦さんや赤ちゃんに寄り添う医療が実現できます。また、地域の産院で生まれて治療が必要な赤ちゃんも積極的に受け入れるなど“地域に根差した病院”であることを大切にしています」(熊坂栄医師)



坂田知津さん・莉子ちゃん(生後6カ月)

“無事な出産”は当たり前のことではありません



切迫早産で長期入院 温かい言葉に支えられました

切迫早産の危険があるため、26週の時に入院することになった坂田さん。22~36週の間生まれると早産ですが、切迫早産は子宮口が開いたり、子宮と膣をつなぐ子宮頸管が短くなるなど、早産になりかけている状態を指します。2cm以下で危険とされる子宮頸管が、坂田さんは6mmになっていました。

切迫早産は安静にしていることが何よりも大切。入院中は長時間座ったり病棟内を歩くことも禁止でした。「ただ寝ているのがつらくて。時間があるのでいろいろ調べてしまい不安が募りました。妊娠初期、無理に動いたことが影響しているのではと、申し訳ない気持ちになりました」。明るく振舞う坂田さんでしたが、抱え込んでいるものがあると察した助産師や医師たち。入院が長くなればなるほど不安も大きくなるため、どこまで頑張ればいいのか、身近な目標を提案しました。

37週0日で出産

32週になり状態が安定したため、自宅で出産の時を待つことに。正常出産の時期まであと少しになったところに陣痛が始まりました。

深夜に破水し、すぐに病院へ行くと、すでに子宮口は全開の状態。数時間で出産し、元気な女の子でした。「私自身、首にへその緒が巻き付いて危険な状態で生まれてきたと聞いていました。すぐに対応してもらえ設備がある病院だったので安心感がありました」

深夜に病院に着き、生まれたのはちょうど日付が変わったところ。まさに正産期の37週目を迎えたその日です。できる限り早産は避けたい、という坂田さんの思いが通じたような出産でした。

「自分は普通に出産するものと思込んでいました。不安に押しつぶされそうな時も、皆さんの励ましや温かい言葉に支えられました。たくさんの助けがあって誕生した命だと、その重みを受け止めています」

坂田さんはつらい気持ちを一人で抱え込んでしまう傾向があったので、少しでも気持ちが楽になればといろいろとお話ししました。日常生活でも制限されることが多く大変だったと思いますが、37週で出産できたのは坂田さんの努力があってこそ。今後も産後ケアや子育てなどをサポートしていけたらと思っています。



担当の金井早苗助産師

知っていましたか!? 日赤医療センターの医師と助産師がテレビドラマ「コウノドリ」を医療監修



日本赤十字社医療センター 第二産婦人科 副部長 渡邊 理子 医師

ドラマ「コウノドリ」のリアルさの秘密 間違いが許されない緊張感のある現場でした

鈴木ノユウさん原作のテレビドラマ「コウノドリ」の医療監修を担当しました。台本のチェックや使用する医療器具の確認、役者さんへの動きの指導など、範囲は多岐にわたります。医療現場を忠実に再現することが求められたので、ちょっとした手の動きやセリフにも気を配りました。

出生前診断や不育症、産後うつなど、取り上げられた内容は私たちが日々直面していることばかりでした。それだけに間違ったことは伝えられないというプレッシャーは大きかったのですが、私自身もよい勉強になりました。ドラマで描かれた出産は特別なことではなく、誰にでも起こり得ること。ドラマを通してこうした現実を知ってもらおうことができたのは、とてもよかったと思います。



1994年から産婦人科医師として出産の現場に関わる。「コウノドリ」の医療監修は前シリーズに続き2回目。撮影にも立ち会い、医療指導を行った シーズン2の台本

地域に根差して65年 葛飾赤十字産院



年間約2000件の出産をサポートする葛飾赤十字産院。毎年葛飾区民の4人に1人が、この産院で生まれている計算です。最大の特長は各部署が連携した「チーム医療」の実践。その1つに、臨床心理士による「こころのケア」があります。「産前・産後は精神的に不安定になりやすい時期。子育てに関する不安や出生前診断などで難しい選択を迫られている人の気持ちを受け止める場所が必要です」(坂井玲奈臨床心理士)

ほかにも多職種で組織横断的に構成される「妊産婦支援チーム」もあります。妊産婦さんをどう支えるか、週に1回カンファレンスを

日赤の周産期医療への取り組み

周産期とは妊娠22週以降から生後7日未満の時期。この時期のお母さんと赤ちゃんの健康を守るために高度な医療を行うのが「周産期母子医療センター」です。周産期母子医療センターには、産科医と新生児科医が24時間・365日体制で勤務し、MFICU(母体胎児集中治療室)6床、NICU9床の機能がある「総合周産期母子医療センター」と、地域医療圏の中で総合を補佐する機能を持



つ「地域周産期母子医療センター」に分けられています。

日赤は「総合周産期母子医療センター」を10施設、「地域周産期母子医療センター」を34施設持っています。妊娠・出産・育児期にいる女性の健康について専門的な知識、技術をもつ、全国で70人しかいない「母性看護専門看護師」が在籍する病院もあり、より専門性の高い医療を実践しています。

また、「日本赤十字社医療センター」は東京都から「母体救命対応総合周産期母子医療センター」の指定を受けています。これは緊急に母体救命処置が必要な妊産婦さんが近くの救急医療機関などで受け入れが決まらない場合に、必ず患者さんの受け入れ治療を行う施設です。周産期医療の「最後の砦」として重要な役割を担います。

今号表紙を描き下ろし! 鈴木ノユウ先生からメッセージ

カラー原稿を描く時はいつもドキドキします。特に赤ちゃんを描く時はできるだけ穏やかな気持ちで描きたいので、ドキドキが収まるまで待ちます。なので筆を下ろすまでに時間が掛かってしまう。

この度の「赤十字NEWS」の表紙はとても穏やかにワクワクしながら描かせていただきました。ありがとうございます。



TOPICS

老朽化した「赤十字子供の家」がリニューアル

子どもたちの笑顔のために

戦災孤児の受け入れから始まった「赤十字子供の家」。さまざまな事情により、施設での養護を必要とする児童を養育、自立支援を行う児童養護施設です。施設の老朽化が進んだことから新築移転し、建て替え資金をクラウドファンディングなどで得て、1月に引っ越しすることができました。多摩美術大学の4人の教授に、園庭や家具、テキスタイル、ロゴのデザイン制作に参加してもらうなど、多くの人々の「子どもの健やかな成長」を願う気持ちが集結し、新しい暮らしが始まっています。

「赤十字子供の家」は、武蔵野赤十字病院(東京都武蔵野市)に隣接し、2〜6歳の子どもたち40人が暮らしています。雨漏り、床の沈下、配管詰まりといった老朽化、そして子どもたちへさらなる専門的ケアを提供するため、このたび同じ敷地内に施設を新築移転。移転にあたっては、近年注目されている新しい募金方法であるクラウドファンディングで約1200万円寄せられたほか、東京都日赤紺綬有功会からの寄付や都からの補助金など、多くの人々に支えられました。

新しい家は、大きな窓が配された光あふれる建物。「家庭的な雰囲気」「子どもたちのプライバシー」「地域支援」「職員の環境改善」が重要視されています。

一般家庭で暮らすように、各グループごとの部屋には玄関が設置されたほか、リビングには対面式キッチンが設けられ、子どもたちの目の前で食事が作られるようになりました。以前は別室で作られていたため、子どもたちはそれが調理されたものだという認識がなかったそうです。

また、臨床心理士が心理治療を行うための心理室を児童棟から離れた事務棟に作るなど、子どもたちが周りを気にせずケアを受けられる部屋も確保。やがて高校生になるまで受け入れることも想定し、個室も準備しました。

新生活を通して、子どもたちが「大切にされている」「守られている」と実感し、心も体も健やかに成長できるように、新しい家に関わった全ての人々と一緒に、日本赤十字社は見守っていきます。



引越前前の「赤十字子供の家」



「ほら！雲のカタチ！」

「ライトは雲の形なんだよ」と話す保育士に、「くも!?」とびっくり



園庭は南向きで、日なたぼっこにも最適!



いただきますー!

「今日から新しいお家での生活が始まるね。いただきます!」 キッチンから「はい、どうぞ!」



翼を表現したロゴマーク。フォントもオリジナルで「毎日目にするモノに愛着を持ち、やがては自分や仲間のこと大事にしてほしい」という思いが詰まっています



いろいろ楽しそー!

あっちもこっちも興味津々



「クルクル!」

親が子を抱く姿を抽象化したデザインも



「フカフカフワフワ!」

子供の家用にデザインされた、表裏で色と柄が違うカーテン。かくれんぼ? 足だけ見えてるよ



成長に合わせて、パーツを組み替えながら長い間使えるように、とデザインされた椅子

“こころのケア”は支援の柱

こころのケア指導者養成研修会を開催

阪神・淡路大震災を機に、被災者や、災害救護活動に当たる救護者のストレスが認識されるようになりました。被災経験は、人間にさまざまな形でストレスを与えます。日赤は、被災者に寄り添う“こころのケア”を重要な柱と位置付け、指導者の育成に取り組んでいます。

“こころのケア”は、広義には、精神科医などによる治療・介入を伴う精神保健支援と、訓練を受けた要員による心理社会的支援を指します。日赤の“こころのケア”は主に後者にあたり、寄り添い、傾聴、共感、困り事への対処をポイントとする“こころの救急法”の実践を通じて、被災者一人一人への心理的支援とともに、人間関係や帰属する地域社会

との関係に働きかける社会的支援も行っていきます。日赤では、各都道府県支部でこのような“こころのケア”を行う要員を確保できるように、2003年度から本社にてこころのケア指導者を養成しています。今年度は2会場で開催し、計71人が新たに指導者となりました。約1万4000人に“こころのケア”を

提供した東日本大震災や、熊本地震での実際の活動などを学んだ参加者からは「全ての被災者、救護者に“こころのケア”が必要」「被災者に何か話しかけなければと思ひ込み不安だったが、そばにいて寄り添うだけでも“こころのケア”になることを知った」などの声が上がりました。



体に触れてもらうだけで人は落ち着く。手当ても重要なスキル



東日本大震災から1カ月後の避難所で行った“こころのケア”。被災者への支援は今も続いている

「皆さんには人の命を救う力がある」

小林麻耶さんが講師を務める「いのちの授業」

昨年11月、神奈川県の上高等学校で、フリーアナウンサーの小林麻耶さんを特別講師に迎えた「いのちの授業」が行われました。同年6月に亡くなった妹の麻央さんの話を交え、献血の大切さと命の尊さを高校2年生に伝えました。

大勢の生徒に迎えられ、緊張した面持ちで壇上に立った小林さん。分かりやすく献血の大切さを伝えます。「献血という大きな事故の際に使われるというイメージがあるかもしれませんが、実はがんの治療で使われることが一番多いのです。そして、毎日約3000人が献血を必要としています。時間にすると30秒に1人の割合です。今、こうして私が話をしている瞬間にも、献血によって命が繋がっているのです」



想いを伝えようと壇上を積極的に動き回る麻耶さん



それぞれが自分にできることを考える貴重な時間に

小林麻耶さん いのちの授業

<http://ken-love.jp/hatachi/inochi/>



輸血によって救われる命があることを痛感した小林さん。大切な人が目の前で輸血を必要としていたらどうするか考えてほしいと問いかけます。「10代の皆さんにとっては、遠いことのように感じるかもしれませんが、でも、献血は16歳からできます。皆さんには人の命を救う力があります。16歳で誰かの命を救うことができるなんて、すごいことだと思いませんか」

現在10〜20代の献血者数は年々減り、この10年間で40万人も減少。献血できるのは69歳まで*です。少子高齢化が進むと、献血できる人はさらに減ってしまいます。だからこそ、若い力が必要とされているという現実を伝えました。

そんな熱い想いが伝わり、授業を聞いた生徒からは「こんなちっぽけな自分でも人の命を救うことができると知って、絶対に献血しようと思った」という声もあがりました。

最後に「人生は何があるか分からない。だからこそ、自分を大切にしてほしい。そして、自分の大切な人のことも思いやってほ

自身の経験をもとに語りかけるメッセージはとても力強く優しい

*65歳以上の方の献血については、60〜64歳の間に献血経験のある方に限ります

しい」と授業を締めくくりました。今後も小林さんによる「いのちの授業」は続きます。ぜひ、皆さんもウェブムービーから授業に参加ください。



最愛の妹・麻央さん(左)との思い出を交えながら一生懸命に想いを伝えました

「はたちの献血」キャンペーン 2月28日まで

若者を中心に、献血への理解と協力を求める「はたちの献血」キャンペーン。新キャンペーンキャラクターを務める女優・広瀬すずさんを迎え、1月11日に記者発表会が行われました。「献血は、つながり。“つながり”

広瀬すずさん「献血は、つながり」

は人と人をつなぐもので、そこには情があると思います。友達や恋人、そして家族との絆が献血への思いと重なり合う。人は一人では生きていけないので、“つながり”を大切にしたいと、すずさん。1月から放送されているテレビ

CMのテーマが「いっしょに行こう」ということから、誰と行きたいかを聞かれると「母ですね。母と一緒になら安心できるし、一歩踏み出す時に心強いので!」と笑顔。撮影を通して献血を身近に感じたと語りました。



「とっさのとき、どうする?」は切り取って保存していただけます

file.8 とっさのとき、どうする? 顔の片側がゆがんでいる、ろれつが回らない... 表情や反応がいつもと違うときは!? 脳卒中 1. 顔面を観察する 2. 挙手を促す(両腕) 3. 会話を試みる

AREA NEWS

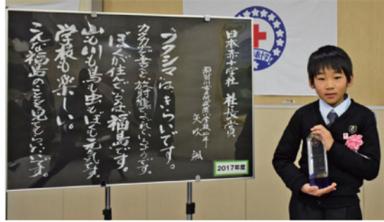
全国各地、あなたの生活のすぐそばで、日本赤十字社の活動は行われています。

- 日本赤十字社支部(各都道府県) … 47支部
 - 病院など医療事業施設 … 103カ所
 - 血液センターなど血液事業施設 … 232カ所
 - 社会福祉施設 … 28カ所
 - 看護師など養成施設 … 25カ所
- (平成29年4月1日現在)

福島県 “震災後の未来”を想う子どもたち「詩・100文字提案」表彰式を開催

昨年12月25日、日赤福島県支部にて“わたしの青少年赤十字 詩・100文字提案”の表彰式が行われました。このコンテストには県内の小・中・高校から5000点以上の応募があり、優秀作には日本赤十字社長賞などが贈られました。

受賞作が朗読されると、福島県の現在や未来を想う子どもたちの熱いメッセージは出席者の心を打ち、会場は盛大な拍手に包まれました。



子どもたちの作品は日赤福島県支部ウェブサイトでもご覧いただけます

群馬県 草津白根山が噴火 医療チームを派遣

1月23日、群馬県の草津白根山が噴火。群馬県支部は同日、医師や看護師、事務職員で編成したDMAT 6チーム(前橋赤十字病院から5班、原町赤十字病院から1班)をドクターヘリなどで現地や県災害対策本部へ派遣し救護活動を行いました。また、毛布180枚を現地の対応拠点となっている西吾妻福祉病院に届けました(23日14時現在)。



皆さまからのご支援により、救護活動は支えられています

茨城県

英語? フランス語? いえ、茨城弁! “方言手ぬぐい”で活動支援

日赤を支援する寄付金付き商品“方言手ぬぐい”が発売されました(企画制作:風呂敷専門店「ふるしきや」)。購入すると売り上げの一部が寄付され、災害救護など「いのちと健康、尊厳を守る」活動の支援につながります。

手拭いは、茨城弁が外国語風に表現されており、文字列に沿って折ると、6通りの方言の鉢巻きになるというユニークなデザインです。



“ふるしきや”ネットショップなどで販売中。1枚864円(税込み)

京都府

小学生が車椅子に初挑戦! 体験もとに障害への理解を深める

12月10日、京都市青少年赤十字教育研究会が子ども体験教室“ふれあいバスケット”を開催。車椅子バスケットクラブ“京都UPS(アップス)”の選手の方々に協力していただき、パラ五輪でも注目される車椅子バスケットや、障害物のある廊下での車椅子操作を体験しました。普段は気が付かない、障害のある方の苦労やがんばりなどへの理解を深める良い機会となりました。



「障害物を運んで通るだけでも大変だとわかった」と参加者

第91回代議員会開催公告

平成30年3月23日(金)、午後1時から新霞が関ビル「全社協・瀧尾ホール」(東京都千代田区霞が関3丁目3番2号)において第91回代議員会を開催し、下記の事項を付議いたします。

平成30年2月1日 記

第1号議案 役員を選出について
第2号議案 平成30年度事業計画について
第3号議案 平成30年度収支予算について

常任理事会開催報告

平成30年1月19日、本社において平成29年度第9回の常任理事会が開催されました。

1 規則の改正について
(日本赤十字社職員給与要綱の一部改正) 審議の結果、原案のとおり議決されました。また、柏原赤十字病院の廃止および兵庫県立丹波医療センター(仮称)等への統合再編、都市部における赤十字運動の展開についてマニフェストを対象とした事業推進へ、予算の補正にかかる12月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

若い世代が主役の海外支援! 全国各地で行われた年末募金活動

日本赤十字社とNHKが共同で毎年12月に実施している“海外たすけあい”キャンペーン。海外で苦しい生活を余儀なくされている人々を助けたいと、昨年も全国各地で活動が展開されました。

今年もJRC(青少年赤十字)の子どもたちが各地で元気に大活躍。大分県のJR大分駅前では12月1日、JRCに加盟する園児15人をはじめ、赤十字ボランティアや職員など、総勢42人で募金活動。参加した園児たちは、冷たい風に負けず元気よく呼び掛けており、そのかいあって例年の約3倍のご協力をいただくことができました。

香川県では、12月2日に高松駅と高松丸亀町番街前ドーム広場の2カ所で街頭募金活動を実施。県内青少年赤十字加盟校8校の児童・生徒や、高松市赤十字奉仕団、青年赤十字奉仕団の皆さんが募金活動を行いました。

京都府では、JRC高校生メンバーと指導者、支部職員による街頭啓発募金キャンペーンを12月9日に四條河原町、そして23日にはイオンモール京都で実施。特にイオンモール京都では、京都府学生献血推進ボランティアによる“全国学生クリスマス

ス献血キャンペーン”も同時に実施しました。同じく、学生献血キャンペーンと海外たすけあいのコラボを主催したのが愛知県学生献血連盟。12月17日に名古屋栄栄広場でイベントを開催。ボランティアによる街頭呼び掛けのほか、特設ステージ上では名古屋第二赤十字病院の職員がバングラデシュでの救援活動について話すなど、多くの方に赤十字事業へ触れていただくことができました。



日赤公式マスコットキャラクター、ハートラちゃんと一緒に募金を呼び掛ける園児たち

全国 NHK 海外たすけあい



香川 35年目となる今回は総勢150人が募金活動に参加。子どもたちの元気な声が響いた



京都 2会場で皆さまからいただいたご寄付は合計で5万5754円に



愛知 愛知県学生献血連盟“Aichi-Go”は愛知県内で若年層に向けて献血を推進している団体

●募金総額は3月上旬に日赤ウェブサイトにて報告。また、募金が活用される事業の活動報告も今年中に同サイトで公開いたします。

「知って良かった!健康豆知識」は切り取って保存していただけます

日赤のドクター&ナースが教える 知って良かった! 健康豆知識

40代から“筋トレ貯金”で「膝痛」予防!

いずれにせよ、予防にもっとも効果的なのは運動で、特に太ももの筋力アップは欠かせません。すでに発症している人は「なるべく負荷をかけず安静に」と考えがちですが、むしろ痛みがないときはご自分の環境に合わせ、太ももを意識しながら、サイクリング、スイミング、ランニングなどをされると再発予防になります。

負荷の目安は「脚がだるくなるまで」。筋力は、鍛えなければ1年に1%ずつ減っていきます。40歳の筋力は80歳になると6割まで減少します。症状が改善されても、運動を継続し、習慣付けることが大切です。



筋力を鍛えることで軟骨のすり減りを抑え、変形性膝関節症や偽痛風を予防することにつながります ※ 液体の中から結晶や固形状の物質が見れること

一番のプレゼントは笑顔! 年末・クリスマスイベント

全国各地の赤十字施設で多くのボランティアにご協力いただき、さまざまなイベントが開催されました。

大阪府では12月6日、7日に赤十字裁縫ボランティアが、愛情あふれる手作りのバジマや帽子などを府内の乳児院へ寄贈。12月中旬、大阪府支部の芸能奉仕団が府内の養護老人ホーム4施設を訪問し、多彩な演目を入所者の皆さんへ披露しました。

宮城県でも亘理町分区分芸能赤十字奉仕団が12月13日にクリスマス会を実施。歌や踊りで参加者と楽しい時間を過ごしました。

12月14日、京都第二赤十字病院で職員によるクリスマスコンサートを開催。12月22日と25日には京都府支部有功会が京都第一・第二赤十字病院の小児病棟を訪問、子どもたちにプレゼントを配りました。



京都 多くの患者さんが歌を口ずさんだり笑顔で演奏を聴くなど、楽しい時間を過ごしました



宮城 “ピース&スマイル”が合言葉。華やかな衣装とメイクで明るいクリスマス会に



大阪 心のこもったプレゼントに子どもたちも大喜び。早速試着をして楽しんでいました

「人道」のともしびを日本中に 赤十字レッドライトアッププロジェクト

赤十字の創始者アンリー・デュナン生誕日の5月8日は世界赤十字デー。日本赤十字社では、この日を中心に日本各地を赤十字色に彩る「赤十字レッドライトアッププロジェクト」に取り組みます。

より多くの方に、紛争や災害で苦しむ人に寄り添い、人道活動を行う「赤十字運動」への理解を深めていただくためのプロジェクトです。今年で3年目を迎えるこの運動を共に盛り上げてくださる、幅広い企業・団体のご参加をお待ちしております。

ライトアップ期間 2018年5月8日を中心に(5月の運動月間中)



参加企業・団体募集中!

昨年、歴史的建造物やランドマークなど全国39施設が参加。昨年の事例は日赤ウェブサイトで紹介しています

「赤十字レッドライトアッププロジェクト」への参加に関するお問い合わせは koho@jrc.or.jp まで。

present プレゼント

“方言手ぬぐい” 5名様 にプレゼント!

エリアニュースで紹介。外国語みたいな茨城弁がかっこいい!

希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
⑤赤十字NEWS 2月号を手に入れた場所(例/献血ルーム)
⑥2月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
A.表紙 B.命はすべて尊いもの C.子どもたちの笑顔のために D.“こころのケア”は支援の柱 E.“皆さんには人の命を救う力がある” F.広瀬すずさん「献血は、つながり」 G.とっさのとき、どうする? H.エリアニュース 1.健康豆知識 J.プレゼント K.ワールドニュース(シリア) L.ワールドニュース(マーシャル諸島) M.人道支援の現場から
⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice(読者の声)への投稿もお待ちしております。

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 2月号プレゼント係 FAX / 03-6679-0785 メール / koho@jrc.or.jp (件名「赤十字NEWS 2月号プレゼント係」) 2月26日(月)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます ※個人情報・賞品の発送のみに使用いたします



WORLD NEWS

- シリア難民の越冬を支援
- マーシャル諸島赤十字社の正式承認



裁縫の技術を生かし、配布された毛布を冬用衣類へ作り変えるウム・ハマッドさん ©シリア赤新月社

中東シリアの難民を、 厳しい寒さから守る越冬支援

シリアで勃発した紛争は今年の3月で8年目を迎えます。死者は25万人(2016年末時点、ICRC※1調べ)、約540万人が難民となって欧州や周辺国に逃れ、国内避難民も630万人以上に(2017年7月時点、国連調べ)。シリア難民の暖かく安全な越冬支援が急務です。

長期にわたる中東の人道危機

シリアを含む中東では第二次世界大戦後最大の人道危機が発生しており、日赤は国際赤十字の一員として、2015年に中東地域紛争



寒い冬に備え、毛布やマットレスなどの救援物資を配布するシリア赤新月社職員 ©IFRC

犠牲者支援3カ年計画を策定し、重点的に支援してきました。他国に避難する人々同様、国にとどまるシリア市民への支援も続け、シリア赤新月社が実施する「こころのケア」活動、緊急物資支援活動などに参加しました。

現在も1300万人以上が人道支援を必要としており、そのうち560万人が緊急支援を必要としています(2017年10月現在、IFRC※2)。毎年この時期に懸念されているのは寒さへの対策です。夏には気温が摂氏45度にも上がるシリアですが、冬には山間部で零度まで気温が下がり積雪もあるため、現在も多くの人々が暖かな家も十分な衣服もなく、凍えるような気候の中で過ごしています。そこで食糧や衛生キットに加え、越冬のための支援品(マッ

トレス、保温性の高い毛布など)が提供されています。首都ダマスカス郊外、ダマールのシェルターでは、シリア赤新月社が配布した毛布を、避難してきた女性ウム・ハマッドさんが裁縫技術により、子どもや高齢者のための冬物の衣服へと作り替え、人々は暖かい服に袖を通すことができました。避難所ではこのように、過酷な寒さを知恵と工夫でしのごうとする姿も見られます。

この冬、IFRCが越冬のために用意した救援物資は、毛布:12万4000枚、マットレス:6万枚、冬用衣類(子ども用下着、靴下、靴を含む):2万5000キットなど。シリアを含む中東情勢は困難を極めています。日赤では引き続き中東支援を最優先課題と位置付け、2018年度からも新たな3カ年計画を策定、支援を継続します。皆さまのご理解、ご協力をお願いいたします。

国際赤十字が“マーシャル諸島赤十字社”を正式に承認

2013年に12人のボランティアから始まったグループが191社目の仲間

地域に密着した熱心な活動で規模を拡大

世界初の赤十字社が誕生した1864年から153年たった昨年12月、新たな仲間となったマーシャル諸島赤十字社は、政府から独立した同国唯一の援助団体です。発足以来、健康教育、血液事業、気候変動への対応や青少年への啓発活動に力を入れてきました。「太平洋の真珠」と称される美しい島国ですが、サイクロンのような自然災害

の影響を受けやすく、特に防災・災害時の緊急救援、救急救命のトレーニングに熱心で、2015年以降、近隣の島からのボランティア500人以上に研修を行っています。こういった活動を通して国際赤十字が定めた条件を満たし、正式に承認されました。



干ばつ対策への意識強化のため、ポリタンクを配布



2017年7月、ボランティアは381人に。災害救急の計画立案にも参加しました

※1 ICRC=赤十字国際委員会 ※2 IFRC=国際赤十字・赤新月社連盟

VOL.16 人道支援の現場から

「折り紙のゾウ」は怖い? ~バングラ避難民キャンプの「こころのケア」~

ミャンマーからバングラデシュに流入する避難民の数は、現在まで65万人に上ります。南東部の避難民キャンプ・ハキムパラに派遣された私の任務は、避難されてきた方々の恐怖や悲しみ、将来の不安に対する「こころのケア」にあたることです。子どもたちには安心、安全なチャイルドフレンドリースペースを設置し、歌や踊り、ボールゲームなど、つかの間でもリフレッシュできる場を提供しました。日本の折り紙は人気の遊びの一つです。

ある日、折り紙で精巧なゾウを折り、ある少女のテントを訪れたことがありました。すると、折り紙

を見るなり少女はおびえた表情に。実は、キャンプ地には野生のゾウが出没し、人的被害が発生していたのです。日本人には親しみのあるゾウですが、状況が変われば全く違う感覚で見ているのだと痛感する出来事でした。

私はこれまで事務管理要員として、チリ、スマトラ、イランでの支援を経験しましたが、「こころのケア」の専門研修を修了し、特性を生かした支援するのは今回が初めて。ストレスへの的確なアプローチは本来備わっている人の回復力を引き出します。今後も専門的知識の幅を広げていこうと思います。



© IFRC

宮本 教子

K y o k o M i y a m o t o

ERU(緊急対応ユニット)第3班
埼玉県赤十字血液センター
医務課医務係長